

『雨月物語』『春雨物語』の過去・完了助動詞のテキスト機能

The text function of past and perfect auxiliary verbs in “UGETSU-MONOGATARI” and “HARUSAME-MONOGATARI”

藤井 俊博

要 旨

本稿は、上田秋成の読本『雨月物語』『春雨物語』に用いられた文末助動詞のテキスト機能を考察する。『雨月物語』では、解説的叙述で「けり」を用いるが、段落末では「ぬ」、文章末尾では連体形終止の「ける」や係り結びの「ぞ～ける」「なむ～ける」が用いられる。このような「けり」や「ぬ」を軸にした文章構造は平安時代以降の物語の形式を受け継ぐものである。

一方『春雨物語』では、全体に過去「き」完了「たり」が多い点に特徴がある。段落末尾では「けり」「ぬ」の他、「たり」による場合がある。また、段落末尾や文章末尾で「き」「しとぞ」「しとなむ」などにテキスト機能の窺える例があり、特徴的である。

総じて、「けり」「ぬ」による枠を作る文章構造は両作品に認められるが、完了の助動詞「たり」や「き」「し」などが活用される『春雨物語』の叙述に新たな表現の工夫がある。

キーワード

テキスト機能 けり き ぬ たり

1 はじめに

現代語において過去・完了の表現が「た」「ている」「ていた」等で表されるのに対し、古典語では完了に「つ」「ぬ」「たり」「り」、過去に「き」「けり」があり、古典物語の叙述ではこれらに用言終止形を加え、多様な文末表現がとられる。そのような多様な文末表現は文章構造に関わり、文章の切れ目や話のまとまりの標識となる機能すなわちテキスト機能に関わる。筆者は、中古～中世の物語・説話において、助動詞「けり」を中心とした過去・完了の助動詞のテキスト機能に着目し、いくつかの論を発表してきた。その大要は藤井(2016)において、「けり」のとり形態や機能も作品や時代によって異なることを明らかにした。中世以降以降、過去・完了の助動詞が文語化して用法差が曖昧になると、「けり」以外の助動詞もテキスト機能に関与するようになってくる

が、近世以降の文語の物語となるとこれまで本格的な考察がなされていない。本稿では、近世読本の名作である上田秋成の『雨月物語』『春雨物語』を題材に、過去・完了の助動詞の文末用法に着目し、文章構造との関わりについて考えたい。

2 過去・完了の文末表現と文章構造の問題

古典語助動詞のテキスト機能は、「けり」をめぐる二つの考察が端緒になった。すなわち「あなたなる世界」を表すとした竹岡正夫（1963）と、『竹取物語』を題材にして「けり」がいわゆる内容をまとめる「粹づけ」の機能を持つとした阪倉（1956）の論がそれである。竹岡の論は、「けり」は語り手の場から物語の世界を「あなたなる場」として位置づけるもので、「けり」は物語世界の対象化して捉えた語として物語論（ナラトロジー）的な観点から新たな視座を与えられた。そのような表現態度の面とも関わって、語り手の対象化の立場が現れやすい物語内容の冒頭や結末に「けり」が用いられやすいという文章論的な観点から「けり」の機能を説いたのが阪倉の論であり、段落や文章全体を粹づけて内容にまとまりを付ける文章上の機能が指摘された。

「けり」その他の助動詞のテキスト機能はどのように発展、展開したであろうか。『竹取物語』や『伊勢物語』などの初期の物語では、「けり」の使用は語り手の立場が現れやすい物語内容の冒頭と結末に自然と集中し、結果的に粹を作っていた面がある。また、『伊勢物語』などでは「にけり」が話の末尾に用いられて話を締めくくる用法も認められた。『源氏物語』のような長編物語でも小段落の切れ目の標識として「けり」が用いられることは西田隆政（1999）などで指摘されているが、そのような区切りを付ける「粹づけ」としての機能が意図的に活用されていると見られるのが、『今昔物語集』の天竺震旦部や本朝仏法部の説話であり、冒頭と結末の一文に「けり」を用いるような典型例が多く見られる。

鎌倉期の説話にいたっても「けり」の粹づけ機能は確認できるが、末尾部においては平安時代に見られた「けり」「にけり」に加え、「ぞ・なむ～ける」の係り結びや連体形終止法の「ける」などをはじめ「けり」を強調した例が多くなっていく。さらに『沙石集』では「き」や「ぬ」が末尾部に用いられる例も多く見られるようになり、末尾部の表現が「けり」によらない傾向も出てくる。もともとは過去の「き」「けり」は語り手の立場からの物語世界の捉え方を表すのに対して、「つ」「ぬ」「り」「たり」など完了の助動詞は、動作の相を表すにとどまるためテキスト機能に関与しにくい。しかし、鎌倉時代以降、古典語助動詞が口頭語の世界で衰退するにつれ、本来の文法機能による使い分けが不可能になってくると、特に話の末尾において、「き」「けり」だけでなく「ぬ」「つ」「り・たり」など完了の助動詞が話を終わる表現のバリエーションとして並行的に利用されるようになってくる。

たとえば『覚一本平家物語』では段落末尾・章段末尾に用いる表現は、平安時代に用いられた「けり」「にけり」の他、「き」や、「たり」「つ」と組み合わせた「たりけり」

「てんげり（てけり）」が用いられ、「ぞ～ける」「ぞ～たりける」「ぞ～し」「ぞ～たる」「こそ～けれ」「こそ～たりけれ」「こそ～てんげれ」「こそにけれ」などのように係り結びの形式をとった強調的な表現形式も末尾部に多く用いられている（藤井2015）。一方、『観智院本三宝絵』では「き」が話の冒頭部と末尾部に用いられる型をとっており、『覚一本平家物語』でも「平朝臣清盛公と申しし」（祇園精舎）「し（き）」で物語を始め「往生の素懐をとげけるとぞ聞こえし」のように「し（き）」で物語全体をくくる枠として用いられている場合も指摘でき、「き」の枠機能も認められる（藤井2016）。このように「き」「けり」によって文章をまとめる用法は、近世の物語においてどのように受け継がれているであろうか。

本稿では、古典語の過去・完了の助動詞を文語として駆使する近世の読本作品において、中世までの傾向をいかに受け継ぎ、どのように助動詞を使い分けて文章を構成しているかについて検証・考察する。対象とする上田秋成の『雨月物語』『春雨物語』は中世説話などに比べると長い作品もあるが、各話の末尾に話末評語が付される点で、古代・中世の説話集と共通面があり、文章構成の方法を比較するのに適している。本稿ではテキストに岩波日本古典文学大系本を用い、段落構成の区別もこれによる。

3 『雨月物語』『春雨物語』の文末表現の概観

（表1）雨月物語の文末表現

	例数	比率%
動詞	300	47
形容詞	46	7
過去	96	15
完了	67	10
断定	19	3
推量	11	2
助詞	14	2
その他	89	14
総計	642	100

（表2）春雨物語の文末表現

	例数	比率%
動詞	548	51
形容詞	47	4
過去	73	7
完了	180	17
断定	54	5
推量	25	2
助詞	47	4
その他	91	9
総計	1065	99

（表1）（表2）に、『雨月物語』と『春雨物語』の地の文について、文末表現の大まかな傾向を見るため、文末の最終要素（「にけり」なら「けり」をとり過去とする）を次の項目に分類し、使用比率とともに示した。

「動詞」「形容詞」

「過去」……「き」「けり」

「完了」……「つ」「ぬ」「たり」「り」

「断定」……「なり」

「推量」……「む」「じ」「けむ」「べし」「けらし」

「助詞」……「と」「なむ」「ぞ」「か」「や」「こそ」「を」

なお、「その他」としたのは、会話文で終わる場合がほとんどで、その他に名詞で終わる場合を少数含んでいる。

いずれの作品においても、動詞終止形による文末表現が約半数を占めていて、古代の物語に見られた傾向が認められる。現代語の動詞終止形が過去形に対して、現在形・未来形の意味を持つものに対して、古典語の動詞終止形はテンス的には無標であるとされる。動詞終止形が多いが、これは物語の事態を裸のままに伝える表現であり、過去・完了の助動詞が語り手の主体的表現であるのと対照して捉えられる。『雨月物語』『春雨物語』において、動詞終止形が中心に用いられていることは、話の展開そのものは無標の表現であることを意味するが、『今昔物語集』のように「けり」が大きな役割を果たすのに対して、『雨月物語』『春雨物語』においては、多様な過去・完了の助動詞がテキスト機能的な役割として重要になってくる。

そこで「過去」「完了」の助動詞に注目すると『雨月物語』で「動詞」の比率がやや低く「過去」の比率がやや高いこと、『春雨物語』で「動詞」の比率がやや高く「完了」の比率が高いことなど、両書には過去表現を採るか完了表現を採るかにおいて傾向の違いが見られる。具体的な考察は次節以降に譲るが、完了「たり」の使用は動詞終止形の使用と連動する面があり、具体的叙述の連続を作りやすい。一方、過去「けり」は語り手の立場から物語世界を対象化する表現であるため、物語内容の区切りに大きく関わってくる。先取りして言うならば、『雨月物語』において「動詞」の比率が低く過去「けり」の比率が高いことは段落末尾や文章末でも「けり」が活用されテキスト機能を発揮しやすいことに繋がる。これに対し、『春雨物語』においては展開部を中心に全体に「動詞」や完了「たり」の比率が高いが、これらの表現は内容の大きな区切りには寄与しにくいいため、段落末尾や文章末尾では他の文末表現が採られる。それが『春雨物語』では、文章末で「けり」よりも「助詞」の「しとぞ」「しとなむ」など「けり」とは別の形式が活用されるといった相違点に繋がっている。

その他の表現では、「断定」「推量」「助詞」などの比率には大きな差がない。これらの表現はいずれも語り手の主観的態度を表す表現が一定程度含まれていることを意味する。話末評語では「過去」の他、「断定」や「推量」の助動詞を用いた表現が多くなるのは当然としても、話の本体においても「助詞」による文末が多い点に注意される。これらの主観的表現の中でも「助詞」は、場合によってテキスト機能に関わって用いられることを示唆している。

4 『雨月物語』の文章構造と文末表現

4.1 過去・完了を含む表現の考察

まず、『雨月物語』の文末に用いられた過去・完了の助動詞の表現について、使用度数の多い順に整理して（表3）に示す。

これによると完了の助動詞では「ぬ」が圧倒的に多く「たり」「り」などは少数である。ただし「たり」は係り結びや連体形終止、「にたり」など強調的表現で用いるが、「ぬ」は語形の上では固定的である点に注意される。

過去の助動詞では、「けり」の系統が圧倒的であり、連体形終止「ける」と終止形「けり」が拮抗する。「けり」はその他、「にけり」「なりけり」「ぞ～ける」「にける」「なむ～ける」「けるとなり」「ぞ～にける」「けるものを」「けるなりき」「たりけり」「なりける」など、完了の助動詞「ぬ」、断定の助動詞「なり」、

助詞「と」などと結びつき、また係助詞「ぞ」「なむ」による係り結びで用いるなど多様な用法で用いており、やはり「ぬ」に比べて多様である。『雨月物語』の文末表現の中においては、助動詞「けり」の比重が大きいことが窺える。

（表3）『雨月物語』の過去・完了の助動詞
（過去） （完了）

ける	37	ぬ	48
けり	32	たり	11
にけり	6	にけり	6
なりけり	4	り	5
ぞ～ける	4	ぞ～たる	1
し	2	にたり	1
にける	2	たる	1
なりき	2		
なむ～ける	2		
けるとなり	2		
けむ	1		
なりけらし	1		
ぞ～にける	1		
けるものを	1		
けるなりき	1		
たりけり	1		
なりける	1		
ぞ～き	1		

（表4）段落末尾の過去・完了の助動詞

けり（終）	けり（体）	ぬ	ぞ～ける	なむ～ける	ぞ～にける
7	6	6	1	1	1

（表5）文章末尾の過去・完了の助動詞

なりけり	けり（終）	けり（体）	ぞ～ける	なむ～ける	にけり
2	1	1	1	1	1
となり	ぬ				
1	1				

次に、『雨月物語』の段落末尾や文章末尾に用いられた過去・完了の助動詞に着目する。（表4）の段落末尾は、日本古典文学大系において設定された形式段落による。また、（表5）の文章末尾は、話末評語の直前の1文（話の本体の末尾）である。これによると前節で見たように、段落末尾・文章末尾のいずれにおいても、過去・完了の助動詞が多くを占めている。しかし、段落末尾と文章末尾では異なる傾向も窺える。

段落末尾では、表には示していないが、動詞終止形15例も見られ、必ずしも「けり」「ぬ」等によって終わるわけではない。これは使用したテキストの形式段落の設定による面もあろう。しかし、その中で「けり」の終止形や連体形の例は多くを占め、また「ぞ」

「なむ」による係り結びの例も含めて「けり」が段落を区切る枠として用いられていることがわかる。また、「場面閉じ」（鈴木1992）に用いられるとされる「ぬ」が多く見られることも特徴に挙げられる。このような傾向は、中古の物語以来の傾向と似通っている。

一方、文章末尾では、動詞終止形は見られず「ぬ」も1例のみと少ない。それに代わり「にけり」「なりけり」「となり」などのような完了の助動詞「ぬ」や助詞「と」を伴い、区切りをより明確化した表現が多く用いられる。このように、段落末尾と異なり、文章末尾が明示的・強調的表現によって締めくくられることは『雨月物語』では固定化しており、古代・中世の説話集などに見られた傾向と同様であることが窺える。

4.2 典型例の考察

次に典型例として「夢応の鯉魚」の例を挙げておく。ここでは一文を一行に収めるために、文の前半部分を省略し、「……」で示しておいた。

【第一段落】

△むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。

絵に巧なるをもて名を世にゆるされけり。

嘗に画く所、仏像山水花鳥を事とせず。

……其魚の遊躍を見ては画きけるほどに、年を経て細妙にいたりけり。

……ゆめの裏に江に入（り）て、大小の魚とともに遊ぶ。

……みづから呼（び）て夢応の鯉魚と名付（け）けり。

……鯉魚の絵はあながちに惜みて、人毎に戯れていふ。

「生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必（ず）しも与へず」となん。

其絵と俳諧とともに天下に聞えけり。

【第二段落】

……人々にむかひ「我人事をわすれて既に久し。幾日をか過しけん」。

衆弟等いふ。

……今や蘓生給ふにつきて、「かしこくも物せざりしよ」と悦びあへり。。

興義點頭ていふ。

……彼人々ある形を見よ。我（が）詞に露たがはじ」といふ。

……家の子掃守など居めぐりて酒を酌るたる、師が詞のたがはぬを奇とす。

……先箸を止て、十郎掃守をも召具して寺に到る。

興義枕をあげて路次の労ひをかたじけなうすれば、助も蘓生の賀を述ぶ。

興義先問（ひ）ていふ。

……かの漁父文四に魚をあつらへ給ふ事ありや」。

助驚きて、「まことにさる事あり。いかにしてしらせ給ふや」。

……或はここち惑ひて、かく詳なる言のよしを頻に尋ぬるに、興義かたりていふ。

【第三段落】

……（夢内容）終に切（ら）るるとおぼえて夢醒たり」とかたる。

……従者を家に走しめて残れる繪を湖に捨（て）させけり。

【話末評語】

興義これより病愈て杳の後天年をもて死ける。

画ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。

ここもて興義が絵世に伝はらず。

其弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。

生る鶏この絵を見て蹴たるよしを、古き物がたりに戴たり。

上記の段落分けは日本古典文学大系本によると、第三段落は長大な夢内容の語りを含む第1文が本話の中心であり、これに続く第2文「捨てさせけり」を文章末としている。しかし、続く話末評語の第1文「……死ける」は後日談的だが、これを文章末と見てもよいと思われる。そう考えると（表5）の文章末尾を終止形「けり」で終わる例はなくなる。

第一段落では、主人公の人物像の紹介をする部分で9文中5文に「けり」が用いられている。「ありけり」で始まるのは説話の慣用的な表現であり、以降の終止形「けり」で解説的な語感で読み手に説明する部分である。筆者は平安時代の物語の「けり」はテンス表現ではなく物語世界を語り手の立場から解説的に述べるモダリティ的な表現（なんと～たのだ）と解する（藤井 2003・2016）が、平安時代の『竹取物語』冒頭のように語り手の解説的な叙述部分に集中的に用いるの場合と同じである。

第二段落では、一転して動詞終止形と会話文によって物語を進行させる。第一段落とは異なり「けり」を用いない叙述によって、物語世界に入り込んだ表現を作っている。

第三段落の冒頭第1文は、この話の中心となる夢語りである。その文の末尾は動詞終止形「かたる」で閉じられて、全体が追真的描写として語られるクライマックス部分となっている。それを受け、「捨てさせけり」、後日談的な「死ける」が続いて話が終結する。これらの「けり」「ける」は、終結を表すテキスト機能を担う表現と見なすことができる

この例は、冒頭に解説的な「けり」があり展開部を動詞終止形で展開し、話末を「けり」「ける」で終わるという構成であり、『今昔物語集』などの説話に見られた典型的な構造を採っている例と言えよう。その構造は、次のように示すことができる。

（冒頭）けり→（展開）非けり→（末尾）けり・ける →話末評語

この例のように文章末尾に連体形終止の「ける」が活用される例が多いが、連体形終止は「ぞ」「なむ」を伴う係り結びの連体形と表現機能は同じであり、「～のであった」

のような解説的な表現を作る。この意味を明示した表現形式が、次のような文章末尾の「なりけり」であって、全4例が見られる。これらはすべて語り手の解説の表現である。

- 幼主海に入らせたまへば、軍將たちものこりなく亡びしまで、露たがはざりしぞおそろしくあやしき話柄なりけり。(白峯)
- ……此亡人の心は昔の手兒女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん」と、かたるかたる涙さしくみてとゞめかぬるぞ、老は物えこらへぬなりけり。(浅茅が宿)

古典語の「なりけり」は「実は～であったのだ」のような気づきの意味であるが、この場合は現代語の「のであった」に相当する意味で終結感の強い表現を作っているのである。

5 『春雨物語』の文章構造と文末表現

5.1 過去・完了を含む表現の考察

次に『春雨物語』の文末に用いられた過去・完了の助動詞の表現について、使用度数の多い順に整理して(表6)に示す。なお「序」と「歌のほまれ」は対象外とする。なお、過去の例の中に次の11種類が見られたが、いずれも該当例が1例のみであるため表から除いている。

こそ～けれ、なむ～たりける、にけむ、けむかし、なりける、りける、にけり、てけり、なむ～りける、けるとなむ、なむ～ける

完了の助動詞では「たり」が120例で「ぬ」

より遙かに多い点が注目される。『雨月物語』には少なかった連体形終止の「たる」3例や、係り結びの「なむ～たる」2例も見られるなど「たり」の強調的な使用も比較的多く見られ、大きく様相が異なっている。「たり」は、平安和文では(登場人物にとって)メノマエ的な描写を作るとされる(鈴木1995)ため地の文の基調となることはないが、『春雨物語』の文章では、現代小説の「た」「ている」に通じる用法(場面の確認)で多用されていると思われる。

過去の助動詞においても、大きく異なる傾向が見られる。「けり」について見ると、『雨月物語』で最も多かった連体形終止「ける」は、複合形の「りける」「けるとなむ」の形で各1例見えるのみであり、係り結びも「ぞ～ける」6例の他、「こそ～けれ」「なむ～たりける」「なむ～りける」「なむ～ける」の各1例しか用いていない。これに代わっ

(表6)『春雨物語』の過去・完了の助動詞
(過去) (完了)

けり	15	たり	120
なりけり	9	ぬ	40
しとぞ	8	り	14
りき	7	たる	3
たりき	6	なむ～たる	2
ぞ～ける	6	る	1
しなり	5		
りけり	5		
たりけり	5		
き	4		
し	3		
たりける	3		
しとなむ	2		
けむ	2		

て活発に用いられるのは「き」である。「き」は係り結びでは1例のみであるが、「しとぞ」「りき」「たりき」「しなり」「き」「し」「しとなむ」など単独形のみならず複合形でも活発に用いている。連体形終止「し」も単独3例と「しとぞ」8例「しとなむ」2例をも合わせると13例が見られ、連体形終止の主流は「ける」から「し」に移っていることが窺える。「き」の全活用形の総数37例は、「けり」の総数52例（「けむ」を除く）には及ばないが、強調的語形や「しとぞ」「しとなむ」のような助詞との複合形式でも慣用化していることから、テキスト機能の面では注目すべき点がある。

そこで次に、『春雨物語』に含まれる各作品の段落末尾や文章末尾に用いられた過去・完了の助動詞を（表7）（表8）に示しておく。なお、「樊噲」上下は「下」のみを対象とする。「歌のほまれ」は対象外とする。

（表7）段落末尾の過去・完了の助動詞

ぬ	たり	けり	たりけり	りき	たりき
6	5	3	2	1	1
にけり	り	りけり			
1	1	1			

（表8）文章末尾の過去・完了の助動詞

しとぞ	とぞ	しとなむ	となむ	なむ～りける	なむ～ける
2	2	1	1	1	1

段落末尾、文章末尾に用いる用法においても、『雨月物語』とは大きく異なっている。

段落末尾では「ぬ」とともに「たり」が多く、「たりけり」「たりき」など複合形式も見られる。『春雨物語』では「たり」を含む表現にバラエティーがあり、『雨月物語』で用いていなかった表現を採る傾向が見られる。

文章末尾では、終止形「けり」は段落末尾に見られた（3例）が、文章末尾では用いないのは『雨月物語』と同じ傾向である。『雨月物語』に見られない用法として、「し」が「とぞ」「となむ」と組み合わせさせた形が多くなっている。その他では、動詞終止形の例が1例ある点や、文章末尾の係り結びでは係助詞「ぞ」でなく「なむ」のみを用いている点も相違点である。係助詞「ぞ」による10例すべてが展開部で用いているのに対して「なむ」による例は文章末尾に用いる例が6例中2例見られる。これは、「なむ」の方が語り口調として意識されやすいことによるのかもしれない。

5.2 典型例の考察

次に典型例として、『土佐日記』をモチーフとした「海賊」を挙げておく。なお、第四段落の5文目以降は大系本では改行しているが、4文目の「副書」の引用であるから一連のものとして切らずに5段落による構成として挙げた。

【第一段落】

……承和その年の十二月その日、都にまうのぼらせたまふ。
国人のしたしきかぎりは、名残をしみて悲しがる。
……父母の別れに泣（く）子なしてしたひなげく。
……酒よき物ささげきて、哥よみかはすべくする人もあり。
……思の外に日を経るほどに、「海賊うらみありて追（ひ）く」と云（ふ）。
……朝ゆふ海の神にぬき散して、ねぎたいまつる。
舟の中の人々こぞりてわたの底を拝みす。
……さる国の名おほえず、今はたゞ和泉のくにとのみとなふる也けり。
……都に心はさせれど、跡にも忘れぬ事のあるぞ悲しき。
……舟の人皆生（き）出（で）て、先、落居たり。
嬉しき事限なし。

【第二段落】

……たいめたまはるべき事ありとて追（ひ）来たる」と、声あららかに云（ふ）。
……風波の荒きにあおはずして、今日なんたいめたまはるべし」と云（ふ）。
「すは、さればこそ海ぞくの追（ひ）来たるよ」とて、さわぎたつ。
……ゆるさせよ」とて、翅ある如くに吾（が）ふねに飛（び）乗る。
見れば、いとむさむさしき男の、腰に広刃の剣おびて、恐しげなる眼つきしたり。
……帯（び）たるつるぎ取（り）棄（て）て、おのが舟に抛（げ）入（れ）たり。

【第三段落】

……とへ。猶云（は）ん。咽かはく。酒ふるまへ」と云（ふ）。
酒な物とりそへてあたふ。
……おのが舟に飛（び）うつり、舷たたいて、「やんらめでた」と声たかくうたふ。
つらゆきの舟も、「もうそろそろ」とふな子等がうたひつる。
……はやいづ〔く〕に〔か〕漕（ぎ）かくれて、跡しら波とぞ成（り）にけり。

【第四段落】

都にかへりて後にも、誰ともしらぬ者の文もて来て、投（げ）入（れ）てかへりぬ。
……手はおにおにしくて清からねど、ことわり正しげにろうじたり。
……然生而得人望、死而耀神威。有徳之余烈、可見、赫々然于万世矣哉。
言のこはこはしき、ほしきままなる、かの海賊が文としらる。
又副書あり。
……あらあらしく憎さげに書（き）て、壱頭どのへ〔と〕書（き）つけたり。

【第五段落】

……さてなん罪にあたらずして、今まで縦横しあるくよ」とかたりしとぞ。

【話末評語】

是は、我欺かれて又人をあざむく也。

筆、人を刺す。

又人にささるれども、相共に血を不見。

第一段落はつらゆきが都に上る場面の描写で、「まうのぼらせたまふ」「悲しがる」「したひなげく」「あり」「云ふ」「ねぎたいまつる」「拝みす」と動詞終止形で事態を描写し、末尾4文の強調的な「也けり」「ぞ悲しき」「落居たり」「限なし」で終わる。コメント的な「限なし」除くと直前の「たり」文によって第一段落は統括されていると見られる。

第二段落は、海賊が登場する場面で、「云ふ」「云ふ」「さわぎたつ」「乗る」「したり」「入れたり」のごとく動詞終止形と「たり」を連ねた迫真的描写が続く。「眼つきしたり」は存続「ている」の意味であるが、その後の「入れたり」は「入れてしまった」のようなパーフェクトの意味であり、段落末で内容を統括する役割を果たしていると解される。

第三段落の第1文は、海賊が学識を持って和歌や政治についてつらゆきを問い糾す長大な台詞の部分で、展開部の重要場面である。台詞の後に「あたふ」、「うたふ」、「(うたひ) つるる」(「つ」の連体形「つる」の強調形(長音形)と思われる)をつらねて盛り上げ、段落末尾を「とぞ成りにけり」で場面の大団円をまとめている。この「ぞ〜けり」の部分は連体形になっておらず係り結びとしては誤用であるが、表記が長音になっているように強調的語感を演出していると言える。「けり」の表記は謡曲「船弁慶」を踏まえた口調を利用し、長台詞の場面を詠嘆的に締めくくる趣向なのであろう。

第四段落は、都に帰ってから海賊からの書(菅相公に関する論と、先の長い台詞で言い落としたことを書き添えた手紙)の内容である。この後日談的部分は、「かへりぬ」「ろうじたり」「しらる」「あり」「つけたり」などの文末で構成される。

第五段落は、それを讀んだ「学文の友」が、海賊の正体を文屋秋津だと見破った場面で、「〜とかたりしとぞ」と結んでいる。これを受け「我欺かれて又ひとをあざむく也。筆人を刺す」という話末評語が続く。

この例では「けり」は話を途中で大きく区切る役割を担っており、末尾の「しとぞ」は話全体をまとめる働きをしていると解される。これを図示すると「海賊」の文章は、次のように「たり」「けり」「し」を用いた重層的構造であると解される。第一段落・第二段落・第四段落などの小さな内容の纏まりの末尾には「たり」、第三段落の大きな話の切れ目には「けり」が配され、第五段落の大末尾には「しとぞ」が配されるという構成である。

(冒頭) たり → (展開) たり → (末尾) けり → (後日談) たり しとぞ → 話末評語

6 『春雨物語』における過去の助動詞の機能

「海賊」のように「し」で大枠をつくる構成にはどのような意図があるのであろう。

『春雨物語』の序文に「人に欺かれしを、我又いつはりとしらで人をあざむく、よしやよし、寓ごとかたりつづけて、文とおしただかする人もあればとて」とある。意味は難解だが趣旨は、「まことと読んで読んだ書に欺かれ、また、自分の書いたものも偽りと知らないで人を欺く。空ごとを語りながら、文（正史、立派な書）として読ませる人もある」意と解される。ここには事実性（まこと）と虚構性（そらごと）の境の曖昧さの認識があるように思われる。『春雨物語』は、「血かたびら」「天津処女」「海賊」のような冒頭三編の歴史物語的な話が原型とされ、巷説に取材したとされるその他の物語などが後に加えられて成立したと考えられている。歴史物語的な話では過去の事実と捉える「き」が多く選択されるが、そこには虚構性の要素もあるため「けり」も同時に用いられる。逆に、巷説に取材した話では、「けり」を主にしながら「き」が用いられる場合もある。序文に読み取れる事実性と虚構性の問題は、「き」と「けり」の使い分けとも関わると思われる。

「き」とともに注目されるのは、伝承形式の「と」である。『春雨物語』では、全体に「と」による文末が多く使用され、総計「とぞ」27例（うち文章末尾4例）、「となむ」5例（うち文章末尾で2例）などが見られるが、『雨月物語』では、「となり」3例（うち文章末尾1例）、「となむ」1例、「とかや」1例が見られるにすぎない。また、過去の助動詞と「と」の組み合わせた例では、『春雨物語』に「しとぞ」8例「しとなむ」2例があるが、『雨月物語』では「けるとなり」2例があるのみで、「し」と組み合わせた例は見られない。このように『春雨物語』において意図的に「とぞ」「となむ」を導入しており、加藤（1998）が歴史的事実・公的事実を意味するとした「し」と連動して用いている。

そこで次に、「しとぞ」「しとなむ」¹などの表現がどのように用いられているか見ていこう。「海賊」の例のように文章末尾を「と」で終わる例は、表8で示したように8話中6話である。6話の中でも「天津処女」は「とぞ」「となむ」を展開部に特に多く用いており、典型的な使用傾向を窺うのには都合がいい。次に同話から全8例を引用する。

- 「今一たび取（り）かへさまほしくおほしぬらん」と、ひたいあつめて申（し）あへりとぞ。
- ……賢臣等いさめ奉（り）しはまこと也けりと、漢書のその巻さぐり出（で）て、今をあをぎたてまつりしとなん。
- ……時々「文よめ」「歌よめ」と御あはれみかうふりしかば、いつとなく朝政もみそかに問（ひ）きき給へるとぞ。
- ……帝五八の御賀に、興福寺の僧がよみて奉（り）しを見そなはして、「長歌は今僧徒にのこりしよ」と、おほせありしとぞ。
- かく男さびたまへば、宗貞がさがのよからぬを、ひそかににくませたまひしとぞ。

- 太后是をも、逸勢が氏のけがれをなすとて、「重く刑せよ」と、ひとりごたせたまひ〔し〕とぞ。
- 「いかでとどめざる」と、打(ち)うめかせたまひぬとぞ。
- 僧正花山と云(ふ)所に寺つくりて、おこなひよく終らせたまへりとぞ。

「天津処女」の段落末尾を並べると「動詞終止形→りき→たりき→なりける→なりけり」と続き、助動詞「き」と「けり(ける)」が主に用いられていることがわかる²。つまり、上記の8例は、最後の例を除けば、特に段落末尾に用いているわけではなく、展開部の説明的な叙述で多く用いているのである。例えば次の箇所のような例である。

淳和のきさいの宮、今、太皇后にてましませり。橘の清友のおとどの御むすめ也。円提寺の僧奏聞す。「橘の氏の神を我寺に祭るべし」と、先帝の夢の御告ありしとぞ。帝さる事にゆるさまくおぼすを、太后の宮聞(こ)し召(し)て、「外戚の家なり。国家の大祭にあづからしむるは、かへりて非礼也」とて、ゆるさせたまはざりし也。葛野川のべ、今の梅の宮のまつりは是也。かく男さびたまへば、宗貞がさがのよからぬを、ひそかににくませたまひしとぞ。伴の〔健岑〕・橘の逸勢等、さがの上皇の諒闇の御つつしみの時に乗(じ)て謀反ある事を、阿保親王のもれ聞(き)て、朝廷にあらはしたまへば、官兵即(ち)いたりて搦めとる。太后是をも、逸勢が氏のけがれをなすとて、「重く刑せよ」と、ひとりごたせたまひ〔し〕とぞ。太子は此反逆のぬしに名付(け)られて、僧となり、名を恒寂と申(し)たまへる也。「嗟乎、受禪廢立のあしきためしは、もろこしの文に見えて、是にならしたまふよ」とて、憎む人多かりけり。帝は嘉祥三年に崩御ありて、御陵墓を紀伊の郡深草山につきて、はふり奉るなべに、深くさの帝とは申(し)奉(る)也けり。(「天津処女」第五段落)

この例から文末を抜き出すと、「り→也→奏聞す→とぞ→し也→也→しとぞ→搦めとる→しとぞ→也→けり→也けり」のように変遷している。「也」の説明や「動詞終止形」などに関わりながら説明的叙述の中で「しとぞ」「し也」が使われており、段落末尾は「けり」「也けり」で結ばれている。すなわち、この例の「し」「とぞ」は、「也」などと同列の説明的描写に用いているわけであるが、段落末尾の区切りの役割は「天津処女」であっても、あくまで助動詞「けり」が担っているのである。

このように歴史物語的な話でも「けり」の枠は見られるが、もともと多く用いられる「き」「し」を含む文末表現を枠の位置で用いることもある。文末の「き」は、「血かたびら」4例、「天津処女」14例、「目ひとつの神」1例、「宮木が塚」1例「焚燗」1例であるが、「天津処女」で段落末尾に2例が見られる。「し」においても、「血かたびら」5例「天津処女」5例で、「血かたびら」で文章末尾に「しとなむ」を用いている。このように歴史物語の性格強い話では、枠として「けり」とともに、「き」「し」も活用される。

一方で、歴史離れした「海賊」や、虚構性の高い「死首の糸がほ」では、文章末尾

で「しとぞ」を1例用いているのみである。これらの文章末尾の「し（とぞ）」は、「き」のもつ事実性の認識の表出よりは、文章を統括するテキスト機能の側面が強く表れた用法であると言えよう。

7 おわりに

過去・完了の助動詞の使い分けの問題は、作品の意図にも関わる重要な観点である。秋成は『雨月物語』では伝統的な物語の用いる「けり」の枠によって虚構の物語世界を作っていた。『春雨物語』になると、歴史物語的な話に「たり」「けり」の枠とともに歴史的過去「き」「し」による枠を導入し、歴史物語的な話以外でも「しとぞ」の形で文章の枠構造を作り出していた。秋成作品では、「けり」「き」「ぬ」「たり」等をテキスト機能の面から使い分け、物語の文章を構成する方法が独自に工夫されているのである。

注

- 1 「しとぞ」は本来「しとぞ聞こえし」であろうが、「し」の重複を避けて省略されるのであろう。なお、「とぞ聞こえし」は『春雨物語』に1例が見られる（樊噲（上））。「とぞ聞こえし」は、『平家物語』などで中世に慣用化していた表現であり、『覚一本平家物語』の最終文にも用いており、中世の語りの方法を踏襲した表現である。
- 2 「天津処女」で、過去の助動詞の使用傾向について見ると、文末に「き」「し」をとる例が総計19例に対して、「けり」は10例であるが、「けり」は枠機能も認められる。

参考文献

- 加藤浩司（1998）『キ・ケリの研究』（和泉書院）
- 阪倉篤義（1956）「竹取物語における「文体」の問題」（『国語国文』25-11）
- 鈴木泰（1995）「メノマエ性と視点（1）—移動動詞の～タリ・リ形と～ツ形、～ヌ形のちがい—」（『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院）
- （1992）『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』（ひつじ書房）
- 竹岡正夫（1963）「助動詞「けり」の本義と機能—源氏物語・紫式部日記・枕草子を資料として—」（『言語と文芸』5-6）
- 西田隆政（1999）「源氏物語宿木の巻の構成方法」（『大分大学教育福祉科学部研究紀要』21-2）
- 藤井俊博（2003）『今昔物語集の表現形成』（和泉書院）
- （2015）「覚一本平家物語の「き」「けり」のテキスト機能—枠づけ表現と係り結び—」（『国語と国文学』92-12）
- （2016）『院政鎌倉期説話の文章文体研究』（和泉書院）